

旅はまだ終わらない

特別会員 柘植 顕彦



はじめに

令和5年3月に定年を迎え本学を去った。平成4年4月に当時の一般教養化学に赴任して以来、31年間、有機化学分野の教育、及び構造有機化学分野の研究を続けることができた。改めて、関係の先生方、職員の方、そして何と云っても私の研究室を選んでくれた多くの学生諸君に感謝したい。退職後、このような執筆の機会をいただいたので、長いようで短かった大学生活を思い起こしてみたい。

本学に赴任

九州大学工学部の博士課程を修了後、筑紫キャンパスにある機能物質科学研究所に助手として採用され、

主に特異な構造を有する有機化合物の合成と物性解明に携わっていた。そんな時、本学に来ないかという話をいただいた。当時は今とは異なり多くの場合、「ポジションが空いたので誰か良い人がいませんか?」、「そう言えばあそこに適当な人がいますよ」というような感じの人事だった。私自身、そろそろ自分の研究グループを持ちたかったこともあり、迷うことはなかった。ただ、一般教養化学というところが気にはなっていたが、ちょうど1年前に偶然にも同じ研究所から応用化学科に赴任されていた市川先生から、学生の配属もあるし、実験スペースもあると伺ったので、安心して赴任することができた。最初の教室会議の場で、諸先生方の前で自己紹介した時の緊張感は今でも覚えている。さて前任の寺田先生は「漆」がご専門ということもあり、実験室は有機合成を始めるには不向きだった。そんなわけで、最初の数カ月は実験室の整備に追われた。捨ててあった実験台



の天板を拾ってきて、カシューを塗ったり、またアングルを組み立てたりと忙しかつたが、研究室第1期生との作業は楽し

かった。その後は、少しずつではあるが、実験器具や分析装置を充実させながら、また幸い多くの学生が大学院に進学してくれたこともあり、比較的スムーズに研究室を始動させることができた。それから約30年の月日が流れ、その間、学部、修士の学生、242名、博士の学生7名が巣立っていった。以下、31年の歴史を簡単に振り返ってみたい。

九重セミナーと阿蘇研修



研究室をスタートさせた後、約10年間、夏の時期に九大、山口大、佐賀大の複数の研究室と合同で、九重の研修所で3泊4

日のセミナーを実施していた。学生にとつては、同じ分野の研究を行っ



ている他大学の学生との良い交流の場になったのと同時に、連日の飲み会で研究室の学生とゆつくりと話すこともできた。ただ、その後、学年歴変更や各大学の事情等で行えなくなった。しかしながら、本学に「長陽山荘」ができたこともあり、それ以降、毎年9月に、阿蘇の地で研究室の研修が復活した。当時、ほとんどの学生は登山に

はあまり興味がなかったようであったが、私が率先して、毎年、少数の学生を連れていった甲斐があり、数年後には、研究室全員で久住の山頂に立てたことは嬉しかったことの一つである。ただ、コロナ禍により中止せざるを得なくなり、結局、復活させることはできなかった。

父兄公开发表会

研究室の行事としていろいろ実施したが、中でも特にやって良かったと感じているのは「父兄公开发表会」であった。これは、学生の卒論や修論の発表会を親御さんをお呼びして行うもので、自分の子どもた



ちがどんな研究をやったのかと
いうことに触れ
ていただく良い
機会となったこ
とは間違いない。
発表会終了後は
懇親会も行い、学

生、ご両親、私と三者間での情報交換も行った。親御さんにも非常に好評であったが、学期末が多忙になり中止せざるを得なかったのは残念であった。

台湾—日本機能性有機化合物シンポジウム



専門は構造有機化学であるが、当時、当該分野の台湾と日本の代表的な研究者が集まってシンポジウムが開催されていた。本

学に赴任後、本シンポジウムに誘われたのは嬉しかったが、毎年このシンポジウムで必ず講演を行うことが決まっていたのは、正直、辛かった。ただ、この集まりを介して多くの友人ができたことも事実で、実は、定年後の10月にも招待されている。

南カルフォルニア大学

九州大学時代、約2年間、博士研究員として南カルフォルニア大学に滞在した。その縁もあり、本学赴任後も長期滞在2回を含め、数多く訪問した。そんな中、過去30数年、残念なことではあるが、日本人留学生は減り続け、さらに日本の大学だけが世界の潮流から取り残され、相対的なレベルが低下しつつあるような気がしてならない。年中行事のように行われてきた大学改革、入試、教育改革、そして改組は一体何だったのだろうか。

有機バイ電子系学会



在職中はいくつかの学会に所属し、日本化学会では九州支部長も務めたが、もっとも専門分野に近い学会がこの有機バイ電子系学会であった。実は、本学会の前身であるシクロファン談話会の立ち上げに、38年前に携わった身としては、非常に思い入れのある学会でもある。特に嬉しかったのは、本学会の平成30年度学会賞を頂けたこと、

野に近い学会がこの有機バイ電子系学会であった。実は、本学会の前身であるシクロファン談話会の立ち上げに、38年前に携わった身としては、非常に思い入れのある学会でもある。特に嬉しかったのは、本学会の平成30年度学会賞を頂けたこと、



そして退職前の2年間、本学会の会長を務めたことである。長年続けてきた構造有機化学分野の研究に一つの区切りがつけられたと思っっている。さらに、第13回

の本学会シンポジウムを当研究室でお世話し、宮崎のシーガイアで実施できたことも良い思い出の一つである。

プサン大学との交流



在職中はどちらかと言えば積極的に国際交流に関与してきたが、その中でも最も充実した交流ができたのは、プサン大学化学

科である。はじめは、九大時代に遡るのだが、何かの機会にプサン大学を訪問した際、プサン大学のスー先生と何故か意気投合し、それ以来、約30年以上、個人的な交流が続いている。そんな個人的な繋がりがから応用化学科とプサン大学化学科との非常に緊密かつ実りある交流を何度も行うことができ

た。やはり、どんな時代になっても人と人との繋がりの重要さは変わらない。
博多祇園山笠



縁あって、福岡の代表的な祭りである博多祇園山笠に長年参加している。すべてのことを忘れて、信頼できる仲間と一緒に

山笠に没頭できる約一週間は、今でも私にとっては貴重かつ他では置き換えることのできない時間である。

最後に

風のように過ぎ去った31年、今振り返ると、月並みだが、多くの情景が走馬灯のように浮かんでくる。ほんとうに楽しく充実した時間であった。大学を離れて初めて実感されるのだが、好きな研究を自由に行えて生活の糧が得られたことには感謝しないといけない。幸い、まだいろいろなことへの好奇心は衰えていないので、今後、可能な限り挑戦は続けたい。私の人生の旅はまだ終わらない。

(九州工業大学 名誉教授)
(工学研究院物質工学研究系応用化学部門 元教授)